俳諧天爾波抄

一

ヘ 5
1865
1

俳諧天爾波抄序

夫聲者皆其物形理之所相摩而生者也形理之所相摩故又有物与生焉聲物是也民之言語者物感于心而意萌焉意所結者

亦物也是以備聲物之所
類以貌其意是其言語之
所由發也古之言語其用
聲物精與其意象適矣是
以其言簡而旨深矣今之
言語不論適否而逐俗習

其聲之所用率皆不能与
物切也補苴以周之故其
言繁而旨亦淺矣是古今
之別夷夏之所同者也是
故晩世之以其辭倣古者
率亦皆準乎薄儕賢於

庸甚者訛白為黒譬猶力
微而運重不取敗於其自
者鮮矣亡弟成章用力於
倭歌思救世之流弊其所
嘗著有挿頭脚結二抄其
子成元纂兮緒而益又宣

明其義也以夫俳歌亦出
於倭歌之支流故間嘗廣
其先達之良規而以辨今
副墨之訛習著之為俳諧
天爾波抄亦猶以演乃父
之所志也書成乞予言其

事因為題

文化三年丙寅孟冬既望

皆川愿書

俳諧天爾波抄

凡例

大人、もと神道歌道もてなりたる。今世俳諧の元祖波を無ぜざるべし。有國が、大人のいとをうづびるこゝろ
なるべし。大人つねに曰、寄よみハ連歌俳諧をいふ。是寄ハ流る、寄よりなれども、是をしらず。俳諧志ハ、寄也。寄ハ流
りなれども、これを人のうねといへども、一家の内にて兄弟
さながら諍ものごとく、いとも、おろかなるものなり。たゞ是寄を
寄とバ二人しるべし。是寄を一人しる也。俳諧ハ寄也。寄
を、今のよの言をもてなむにて、いづれのひとりごゝろ、主なる人を、
さゝるもの、おろかなるものを、ふかくとなれどもこゝろを、ふかくとなるべし。

この歟さうりょうゆき・三道とも法計の媒とぬるより、偏固
なる抗ども出来く、法ひとへんとそどろかるれりとて、大人
うのもとまものとも俳諧をもいとらある時いんとへれるもてあそ
ぶれめ、さうるる連寄俳諧の表流、おのが道ゆ貴うせんとて、
を毒殺と、寄ってむとく別の傳あるがどつひ、先学の法おける
このひひおる言どもをとくるとく外俳やずして、人と慈子する
歎息慨ざるるなり、かにとぞては難とのでうられれ
ど、いとるなくくとうゆるとれと、物語のついぞいられる
こ手ぐるとく、法のよ冊ゆとなりめる也、大人の先考、國学ふの
くのと見ひて、つひと詞と三具こわうち折てり、いとゆる掃頭抛裝（カザリヨリヒ）
抛脚結抛ぐれの抛なり（脚結とは世ふ）この結ふなどのやう、
ゆとこと古今の規範にて、他人の目のをとびぐる所也、この御結

抛をけくとひ法とつぐこと、そこ用ゆとこ、俳諧と用ゆるの
異同あるとしかとひよ、大人のつくぐ連寄のこの御結抛と
てれのつくとその用ゆあぐ、俳諧くかとうの俗語ゆとく、ゆる表
ゆとこと俗のてとゆ、文人用ゆるめあれぐ俳諧とよてとてるの
抛をとしとくあ、俳諧古家の人の眼とひとんのくるぐ、この御結
のりく、即あゆの抛の部立例立ゆとぐりく、大人ぐ心のれとむふとして
りて、その表とのまとゆる也、今このとちく、ものとみと
ゆ用のりくとんんゆあぐれど、この数とのぐりく、四海ぐと
兄弟とんてとんんばとりとぐ、ぐとうぐ
大人のこのと教てるる、神とて
ゆ紫煙没とて事るれぐ、今とぐ他感のととつぐくとりて

これとなりしひとすくあり。これとしたがひし蕉翁の句、および
門弟の句ごとの言葉を時々うつされ、大人が私に
俳諧をもとりつけてあるめ、世をさとる。著作かしれる俵
蓑集の序をとりもちおくれ。
おいとまく、詞をくくりかくるとのこころつて大人ぐ無と
ゆくゆくぐ、俳諧の言葉をだに、著作ぐ世にたりまとり
くくくくとすめるその序をる。「幻術の道」とその句に魂の入
ざわぐ、著作ぐ著みるに俳諧ぐ魂のつくしん
るとおくくく、我弱い御の所、伊賀郷ぐ山中にく、稼ぐ小著とき
とく俳諧のこころをとれるしぐ、ぐちから断絶のことを呼び
くんあるとれわるぐき幻術ぐ、ぐちとくれて、即言霊のるのにく、
拙ち人麻呂乃、言葉れ国とされ、山上憶良「あるぐ

のこちゆくる国とされ、わが業とのくく、その分大なる霊
の、不関の業動をかすことぐ、ぐくくくと幻術とく手あされる者。
これをもくくわぐ、蕉門のもと俳諧をこの入魂とあるものの、
ぐすぐく新考のおそらく碧童とぐのかなものとくくとを尔
波をこの魂の句ぐつくぐる物あわぐ、これを句くくせざわぐいぐら
は幻術をとぐぐ、おをとすく、泳ぎとき教ぐくと、詞のるくものい
くぐくうをとかつぐぐ、は俳諧入魂のくくをくくくとくくこの拙を
ひぐ、へ魂のくくを大人のくれるを著作あり、これとくくとくくぐ。
行くの著みぐ、おくゆめくくとくくく

とうるる川のふかきをうらぐしあうこれ昆とうらいさと
いつてこれをとうるぐしとうるぐしとうるぐし

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

荒野　さらしのるとをかとふ年の雪　除月

同　しのくれ時の実ひろふ袋かな　荷兮

猿蓑　椋干て夜ちるもの音すごく　羽紅

同　きびすをつまれる軒の下　十里

同　五羽六羽産とりる牙うんこ雪　元志

同　梅ヲうれまつこの宿のとろく汁　芭蕉

同　かそけれ夜ゆる山ざくら　尚白

同　ちりのこりよさらをばくら　史邦

同　歌くの心うごう次かまりぞさ　仙化

續猿蓑　初しぐれ小潟の芋乃赤加減　馬莧

同　田植手ちくなる影のうれ田　重行

同　やけづくよるしのく死る秋の蝉　太草

同　ちれやらに床ばくる牙　死の声　一瞬

同　梅さくり中ぶるる次すれ蛇　水鴻

同　ふる倒手なる死さく土大根　乃弦

炭俵　年のくれさびひさき渋づえ　野坡

これらのあれこれをもしかれば天和波とうばるる
ものをもてさやかにつづくかなの用切字とくに敬あらざるこの拙
をとくにかなびしるべきなり

この拙句に尓波をむねとする事かなもまた發句附句をえらぶ
例をもくのせるなり。発句のうつりにくく尓波の用切なるは
発句をあげくらしを無き。句用なるこれをもてなり。程ほ書を
ひらきみくろのてうこれをうるべし

こゝは正例 変例 異例をつかさどるその句のあつかひこれをもむるこ
びと。古歌の例あゆひ拙よくくこれをもくくいつも
てこゝをまなびしえ。ぶげ正例をもくくこれをもくくいつも
とそ。此つゝぐく大人の句学をとそ頭巾をうらとつむぬるもとも
さるうて。祇拙ぎつ。芭蕉翁くいまさもの句ごとと

こゝろよ。俳諧の本源のごとく。ぶげ古のけをもとらず。俳諧は
俗言のかなもてなどなりふるぶくふ人を。一人もあるべきとみゆる。
うの句どくく。古言をとゝはうひるをもるにくく明らかとと。今こ
ゝいつゝなべる。奥くの句をとゝはげるほとゝの奥をもてをべる所
あるべくこゝろぐ

大人曰。ゝよくくこゝ。わが文をぐてゝこゝあるる人。古ゝ言
こゝをぐ。まくく俗語をもれまする俳諧古院。こゝをもひめをこ
とくものなるこのるれぐく。蕉翁をくく俗門者のかぐるかるる
かびしさわしをくくおのく聊。奮激あるるるき事かな
とぐ。有國がこゝろぐひとゝにあるをもこゝをめこゝをぐく。詩み
連句俳諧の古院さぐのこゝいつ俗あるつゝ。あるひ奔ぐとく
このたぐしをとゝぐうこの大人のおのづをとゝるるかぐ

うのさちよ、れを論ぜしれるとゝ蕉翁の腸をみるべ求掃
かるべし

文化三年丙寅夏日　浦井有國　識

目録

五属第一

詠属　や　よ　ふ
疑属　う　を
頷属　ぢ　や
誂属　よ　もぐ　ね
禁属　ふ　ふ何そ

十九家第二

曽家　ず　そ
乎家　を　をの

波家　ば
毛家　も
仁家　に
止家　と
志家　し
乃家　の
邊家　へ
良家　ら
能美家　ぬ
陀尓家　だ
余利家　よ

ぱ
ぴ
ぷ
ぺ
ぽ
ぐ
ぎ
ぐ
げ
ぐ
ぢ
づ
で
ど
ぶ
べ
ぼ

那年家　なん
碁登家　ごと
毛天家　もて
加保家　かほ
那加良家　なから
加天良家　かてら

六倫第三

可倫　べく
不倫　ずん
將倫　しやう

有倫　あり　なり　久
去倫　ね　ぬ
来倫　き　く

十二身第四

氏身　て　て　久
之身　し　す
咩利身　め　む
那利身　な　ら
由久身　ゆ　ゆ
阿不身　あ　ふ

也苗身　や　ま
加奴身　か　ぬ
被身　る　る
令身　す　む
当身　す　ら
如身　ご　ど

八隊第五

義隊　ぎ　さ
久隊　く
介隊　け
加之隊　か
奈倍隊　な　ふ

毋乃隊　こうの
八多隊　そた
加天隊　かてん

以上

右の部ふ〻ワが父成章のあゆい掛の部ふにてそのの種姓をくくくくうけく屬家倫身隊とまもがくかくちあらあの部どワくるるやまし。三形の掛てくくくがまし。てくくくく

俳諧天尓波鈔巻之一

北邊大人口授　　浦井有國　筆受

○五屬　コノ屬家倫身隊ト五門ニワケタルハ・脚結朴ノ大規模ニシテ・古来人ノ弁ゼザル所也・委クハ朴ニアリ

○詠屬上

詠ずる世よりつゝ歌恩なり・凡詞ゝ歌恩うゝ
おゝる物なるまでゝ・ゝと文歌恩をひねゝする
詞ゝ一屬ゝゝなるゝゝる也

や

地でゝゝやとゝゝゝゝ・内のゝゝゝゝ・他ゝゝゝゝゝゝすれど
あゝゝゝぞる事をゝゝゝゝゝゝ天尓波也・そのあゝゝゝゝあるゝゝゝゝ

歌恩の初とくかる也。くるまとなれど四例あり。されどたく
つうい方のかるのまたくしたくしたづつかまも也。はうひ方のか
るゆくい。上下れ事ぐるのかるるとゐるれば也。けた理ハやの字
ゐかぢる事ゐ行ゐす。をづくの天尓波。これ世心とをてんぶび
疑のやハコノ属ニアラズ。別ニ
下ニ疑ノ属アルニ出セリ

○第一例　冠のや　トニ

世例奇ぢくゐ「たくゐやをゐの山亭」みゐはうや
くめのゐゐ山　日上「かづゐやくめぢのくゐ」長歌「言潟
やゐゐの杉山　拾遺　うゐなるが西例と子
春日　ゐくゐやゐ三井の寺の跡ゐう　且葉
これゐ節句「カの筋と縋」中の子　野水　この力れ筋
とゐぶり。三井寺ぶつけゐるのも　サ、ナミハ其ノアメリノ地名ナリ。連歌ノ二六

アラザルナリ。日本紀ニ證アリ　これゐくゐ。ゐるゐの地のゆゑ三井寺
をおきゐく。他の寺ハ循ぜゐゐ。なのひゐゐ
んなり。三井寺の京徒。ゆゑまれで干ゐとゐるひ
づめく。他のもれつぶゐくゐれとくゐなる也。このんとん
ゐずて。やの字ゐこれゐるも。ゆゐくゐかゐのやゐ。
のゐいゐべゐとぐゐ。やといひゐのや。ゐうぐのゐつゐ
んづゐうゐゆゐべまた。やゐゐいつゐ。んひゐうゐわづ。
ゐゐつぐゐれを。ちゐるゐの三井ゐいつけく。ゆで。ちゐを
ゐある三井ちゐいつんぐうゐめく。内の。はゐゐそひ
づゐやゐゆゐをゐひゐひゐやゐらるやゐゐるぐー。さ
まづ世やをつうゐひゐ。なゐよ事ゐるあれ。ゐのゆく
領ゐふをゐゐやゐく。他のゐとゐ。ひとゐく。他のゐの

なくてつの時の用ことかたりてつぐ。これ他の物ハ
等閑ニ[illegible]とさと寸陶かり。貴人、天下波とうひ
ふる。簾畧かたりぬること。世ひとつにくも思ひ[illegible]し

冬日　岡崎や矢矧のくれぬきうれ　杜國

前句　志賀の馬乃ねつきほかなり　野水　馬サヘ
コノ橋ノ長キニ退屈シタル心ニ見テ。即人ノ心ヲ活カ
シタル附ザマナリ。コレ猿蓑ノ序ニ。晋子ガ入竟トイヘル
所ノツケヤウナリ。委シクハソノ序ノ注ニイヘリ

猿蓑　文月や六日もけぬの あをうま　芭蕉

[illegible]ぶまる。西例なり。この文月や。の句。[illegible]
ねど。文月の六日とつづけとやとひ。白なれど。四ド
例かりと。[illegible]。○[illegible]。やの字のいとそ。
上ときつづける事とまよふ。「あつ恨や指のくれ彩考
むさ。[illegible]やゆけども秋の日上「[illegible]」[illegible]心寄　日上

猿蓑　度澤や[illegible]ひ[illegible]ぐ　沾太郎　史邦

月　[illegible]や[illegible]なれ　月　勇良

炭俵　[illegible]ハ蝶のもくまい　丈草

月　[illegible]や[illegible]る簾の長　土芳

月　[illegible]げや[illegible]月見　里東

月　[illegible]山やしすきめ[illegible]　小鯉

春日　古池や[illegible]小の音　芭蕉

[illegible]の[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]
[illegible]「古池の句」[illegible]

匂かりぬべきなり。或ハさびしきかどにあるものなれば
さびしきものにいまだ義乃肺肝とまがるあるべし。
は、古の字を眼をとるべし。これ新乃字の反にて、古ハ。
新法をとるべし。水草萍などはさらなると魂をなす。
うの落るべくおひたる中へ鮒のこびこむ音ハうとく
しるべ。いつくしれぬよりやとりぐさいかるる。或人ふき池の鮒
とび入るとき音も
なき所どかりとと落りき。新池のとりぐさ所かるを感
歌さしれ。四季。この句を世人かるるのもとなく容
るるのあるべし。ひらけ。ひらけ。ぬぎすまし感あり
きひとつ。ひとつ。ひとつ。ひとつ。新池かるるのと落り
かりきあれ。萍生みち。さびし。ぬきびて。何のほとり
訓まれる古代のごくあんりしのんりしなり。

○ひくまく。山例よりとる。新ごく。やとり上河ぐ物ひて
もとり。寄ても「ましもとりやとりんの秋」おもて「ゆーぞや
ぞぐ本岡 後撰「そーぞやぞぐの数」日上かどとる
よる。連俳とて。ひくくとこの例より。連俳とて。例より
も。例かりとも。ひくくするのとこの事なり。
やむ。こくとるぐる梅とれ。とる春とれ。とる。
数おかくて。いうあるるをとるもぐも。連俳。
字おすくるるわぐいるるとる。波とくの
つとこりも。河とぐ。ぐぬぐ。ぐぬぐ。
轉仮をとる例のごくつうや。ぬのあとるる人
ず。歌の例とぐる事とあるやとだもひとつひとまる
とくく誤まり

瓢　疇道やうゝゝ乃時の角大師　正秀

荒野員外　寺さゝぐや晒を買ひて夜をこめて　冬文

月　夜の月やみるに涙のてりつけく　荷兮

月　遠清やほゝとさめさす　蝶羽

猿蓑　ゆうゝゝや頬腫てむ人のうた　芭蕉

月　下京やゆうむうゝ乃ふる雨　凡兆

月　髪剃や一夜ふさびく五月雨　月

月　月の前や夢かさみく五月雨　芭蕉

炭俵　ぎらぐるや宝家机乃あり所　杉風

月　竹のそや笋の掘ぐきのうれき　嵐雪

月　名月や掘とりもち秀の靈　玄来

月　朔ぐほやのうゝ疑ひ乃門乃恒　芭蕉

月　秋ゝうぐやかすびの秋ぬあうゝく　木白

月　寒菊や形樅のりゆ白のうゝく　芭蕉

月　庶ゝや巨燈ぐんのさゝぬうら　其角

月　月のうげやぐうくの上乃親　雀

月　山ぐもや宇治の焙炉のふ間ゝ時　涂頂

月　蛍火やふきとぐうれく時の関　芭蕉

月　紫の戸やぎまめすれて歌をむ　玄来

月　かゝ草やあゝゝうゝく初　史邦

月　うゝ寿やぢの山手芝の刻あぐう　其角

月　閨のうゝや巣をうぐくてうくゝる　玄来

月　振ゝ袁やゝ下庶ゝうりる去の雛　芭蕉

月　前さゝ秋や聲今ぐうけの秋乃風　玄来

凡兆

円　蛍ゆや　永氏碎くおもひつゝれ　芭蕉
円　月のゆや　ものあはれなる海原　市隠
円　小坂うや（赤表）　わかくりわく山ざくら　甚角

續猿蓑

円　石ずゑや　富門あけくゆくすぐる　牡年
円　栗めうや　庵をよりさまる　ものさの秋　露川
円　さゝぶれや　蘿こぶ　素乃畑　芭蕉
円　菓の香や　庵たきれる　腹の香　円
円　咎ものや　門ちかくあるく　その月　里圃
円　ふるよや　稲こく　あのこゝろ　万乎
円　春の雪や　かゝるまも　似ず秋の色　風國
円　食時や　うゝ　下の鉢　叩　跡草
円　松茸や　しゝ　わ　葉のへたゝ　円く　芭蕉

円　えゝ　ものや　累所なく　描の五器　竹戸
円　炭俵　ひるぶゝや　雨のうゝ　花のうゝ　智月
円　世ゝや　年貢ばかり　茅の花　里東
円　ふゝ　ゝや　門をたゝく　豆腐賣　野坡
円　夢や　竹の　蕊　花をふく　芭蕉
円　うの花や　くゝ　柳のをゝ　ひこ　円
円　さゝぶれや　傘　つけるゝ　小人形　其角
円　続猿蓑　月雪や　ちゝ　ゝ　ゝ　

月　秋のくれや　歌あげつる　菊の香の　其角
月　ひしひしと　ひしと栗　くの名の　栗　文考
月　晴嵐や　ちるこの味ある　竿のさき　雅丸
月　そつ雲や　犬の土りく　爪の力あり　小鯛
月　いるまや　鶏鶴ノ能シタメル画ノ賛　うりの所ゲすしたの穂　芭蕉
月　月うげや　海のるきく　長廊下　牧童
月　菅の笠や　のこしぶ詠く　秋の風　荷兮
月　晴きりや　扇とりざすあの　ほそり　下茶
月　花の月や　湖こがらし　川鯉　葉捨
月　そつそつや　しらと若狭の白比丘尼　前川
月　きそそや　ふるしまずす　ふるしまずす　素龍
炭俵
月　花ゆりや　白ぐうらと　実あくや　去来

月　麦畑や　出めけるそ　秋麦の中　野坡
月　ちさぐりや　白傭出くゆく　孫の垣　利合
続猿蓑　うぐひすや　柳のう　敬の　芭蕉
月　藪蹄や　穂　穂まるとぐく　菊の　荊口
月　そそのや　木の股ぐ　花の山　洞木
月　茅家や　たたひのく　松の陰　去来
月　出うくりや　あくれすむる　夏加帳　許六
月　えのよや　くげまくり　水　芭蕉
月　世の業や　髪あれど　若夫　山蜂
月　これ俳や　さくく　吹こむ　朝の寡　子珊
炭俵　そそぐや　ちりくわる　天川　嵐雪
月　そそろぶや　若ぐ追ふ　俳のく　狐屋

同　名月や誰つくる歌子森の鳩　洒堂

同　さらさらや蓼そよぐも涼みかな　支梁

これらこれらの句なども冷まさまの句とよりふ疑もみな詠とも詠るの句とあるもしほせ今世の人げし詠疑かどの例のもとつれあるる拾くくくを

ざるべし半ごすべるとやとりく詠う疑う自為にも

ちくぐるべし今こゝにいつくまるものどもとあるき

むづ高なりかもとうやしもいも詠と疑るこ拾くこつる音

なるるの下のかるの塵下にいづくく上古くかる詠とも

かも疑もしうくくかもこのこいくるとうくまるべし

このあく古人の句にも詠と疑さみゆる句あるるり

後葉　やもちまわぐ今や紀の句いせの句　沢雄

同　まぶ物のまぶれわや鯉のすゝ訓　一嘯

庚俵　ぬぐくれくく蒙抱ゆくや時鳥　芭蕉

続後葉　雪の雨しくるや土筆の長短　閑指

同　門辨やるゆく師走のあるる鼓　里東

後葉　かぶ人の小神子がウセケルナリ　古明干　芭蕉

荒野　あけがのくくまのくじゆや明ゆくる　野水

ゆくの句どもを波を毎ぐるくるるず詠のやう

くもつべ。くれくくれるかくくんくくくくん

かどさびのやのけ河をくづるあにくこづれる疑のやし

ようくこの差別をくくくくくを吐べし

○まぶ物のあるるゆくべ行この例かくあり。さくくも同時

なくやを月奉　又ちくくまやを岡べ日上かどくちり。これく。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

句集　[illegible]　芭蕉

炭俵　[illegible]　土芳

猿蓑　[illegible]　芭蕉

[illegible]

荒野員外　[illegible]　大原喪職の[illegible]　汗六

荒野　[illegible]　杏雨

〃　[illegible]　[illegible]

続猿蓑　[illegible]　[illegible]

〃　[illegible]　[illegible]

〃　[illegible]　[illegible]

〃　[illegible]　半残

〃　[illegible]　惟然

〃　[illegible]　風睡

炭俵　すゞしさや深淵のそのぞくぞくべ　去来
春日　さくらやんさらぐの伊勢参り　荷兮
荒野　ゆりしろや深雪をかすこ花の雲　野人
〃　おぐろくや門もとあかく施餓鬼棚　荷兮
〃　我等武が宮ぬ寄ぬ今朝の春　卓雲
〃　ぬぬ〳〵ぬれぬぬ例あり
○まさ〳〵ぬぬあげる例ぬ初ぬぬぬぬぬやとぬる
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
猿蓑　住つゝ旅のこゝろや蓮目燈　芭蕉
炭俵　梅ぬ人のぬぬれや寒ぬぬ　文草
荒野　うぬぬぬぬぬぬぬや梅の花　芭蕉
続猿蓑　椽ぬぬる情や梅ぬ小豆粥　文考

炭俵　麻のぬぬあぬやぬぬぬの躬恒形　素龍
荒野　うぬぬぬぬぬぬぬ餅ぬぬぬぬ　去来
続猿蓑　ぬぬぬくぬぬや蕨ぬぬの小仙花　氷固
〃　ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　文草
〃　山ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　宗比
〃　目礼ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　西秀
〃　このぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　野坡
〃　嗤の電ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　其角
〃　ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
〃　早稲ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　桃首
〃　ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　乃論
炭俵　ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　芭蕉
〃　ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ　孤屋

同　食の特うるかあり川うるや山ざくら　望彼
猿蓑　うしろのきく代なるや水くさぶす　去来
同　入相のしぐれの中や雲くぶし　羽紅
続猿蓑　けう樹のうけ出す彩や雲の月　丈草
炭俵　さくらの名や淀川大和川　桃隣
同　おちつきしく魚屋や橋ぐり　利牛
同　十四日学りや睦月の古手賣　之道
同　雀ようやすぶ海や　衣ごく　雪芝
同　花ずきとくぐりや村まぐれ　望童
同　月下ちも中の羽や年の時宜　孤屋
続猿蓑　ひつぱりゆくや唐の角　沢雉
猿蓑　人のるとくわくるや海苔　枝峯

同　ひだくりふくく中の指ゑや雑の彩　芭蕉
同　禅寺のわの蕗葉や秋七月　凡兆
同　ちくやつてぶ塔ふかりのさまるを　誠人
同　そ秋くこ方るる比や蕗のむ　芭蕉
同　引みくゆくや雲ゆくてすぶ　未来
同　狼のあとしけすや　涙ぐり　史邦
続猿蓑　黒ぶこのあのそぶりや　わるぶり　土芳
同　こう鉢ゆ　こころやこう川　橋　乙州
同　ぐうりげくこるや　桂のるぶの穴　羽木
炭俵　樽の影　懐ゆまり　ちすや　花の中　如枝
同　初雪のるるや馬の　鼻ぶし　利牛
同　唐黍ぐうげるる彩や　寒まりと　西堂

同　苔のうるはしきの墓や　二三本　子珊

同　鳥のゆくすけぶのうるやの末　徒雖

同　富士　雨のゆめぐや　うるあつい　仙花

○まさ光づ〜きの例かくく

白集　夏の月　御所ゆうづく　赤坂や　芭蕉

うれるりこれくよりあるぐもとたべてうるにく「うの月や

御所ゆうづく赤坂ぐ〜とうぐもと一白をなやにくうけく

夏の月のうぐるもと紀国やうれし　平安人上るうる特例

のやの一例かりうとうとうのう際かりうこれうくも

夏の月ちゆと自在ゆうれ事あるもゆ世の人

ちと動うすぐ〜

○さくうれの例ひくよりあり　その例とうぐるあり

この月の例うくうぐるの事なり

荒野見外　山川や移のくらいのをとうすしん　落梧

同　ものぐやうくうやんあうくに　舟泉

続続蓑　雨や其こけうきん雑の夢　西堂

春日　くるのやぐやのまうこうれん　羽紅

うれくのうれぐ〜やうらんうんんなぐうあるけ

ちわくぐかるぐ数のやの例なりうくこれうく行冠

のやれ例わくやくこうれうくこうるのううくうくく

うくうぐなりくくれぐ連俳くう教すくるぐなるか

うけく猪やくいぐるまぐうれうくも雑くもうぐうれ

ぐ〜くくうぐ変例なりうれぐうれう変例くうくう

用ひもくう科りくまぐうるぐ〜例くうくうれぐ

れすぐくに露例をとのらひぐ。るること。みくこと。
川ぞこ。こ。元永波とあるあとや

炭俵　秋ぐれ　鴨やあがるき　池のうく　依く

この句ぐ。ぐ。例ぐ。ぐ。ぐ。

[illegible]

荒野　[illegible]

[illegible]

[illegible]

らくなりかりのすり　状トハ名所ゆりナドニフ詞ノ名ナリ クハシクハ御結抄ニ見エタリ

荒野　あしけるやけ見車　壽海　むの時　浩芝

同　なつかくるうひるやけるの原　且墨

後葉　いそぐ〜やけ沖めこぐ舟の　玄帆　序帆　玄集

荒野　家〜〜われの陰〜〜〜やけ月のうげ　市柳

同　あづるやけ〜〜初くきく〜〜〜等　傘下

同　三部〜〜あとのたう〜やけ〜〜〜〜　一変

同　鶴鳴のひろ〜〜やけ〜〜〜〜　秋人

同　いそぐ〜やけ〜〜〜〜〜〜〜　一笑

同　何ともなくそぐやけ　ふの月　一泉

同　冷〜〜やけ竹のくる　えの朝　友蘿

同　鄙〜〜　春〜〜〜門　〜〜〜〜　柳点

同　白芦　〜〜〜〜〜〜〜　嵐蘭

同　ちり〜〜やけ麻　〜〜〜〜　秋人

続後葉　をむ乱　〜〜〜〜〜〜　山峰

同　待月の月　〜〜〜〜〜〜　景桃

同　拂ひむ日和　〜〜〜〜〜〜　野茨

同　かるのの〜〜やけ　〜〜〜〜　丈州

同　秋の〜〜〜〜　〜〜〜〜　荊口

荒野　のぐ〜やけ　〜〜〜〜　一井

同　〜〜〜〜〜〜　〜〜〜〜　荷弓

春日　見わく家〜〜〜〜〜　〜〜〜〜　野水

炭俵　拂寺〜〜　〜〜〜〜　荊口

後葉　〜〜〜〜〜〜　〜〜〜〜　史邦

同　　曽良

なでしこの陸奥の一ツ花　　芭蕉

炭俵　翁ヨリ暮ノイキトアリケレバ

瓜ゝつくゝ子ハ八ツ年一期　　治頂

獣

なつかしやひとつの草　　荷号

同

なつかしや屑屋なるあるじと立とまり　　芭蕉

荒野員外

のどかさやき沖りよ荷とゝのて　　琴人

春日

めづらしや藤棚の枝伊勢の帯　　山鮮

続猿蓑

母方の叔父なつかしや姉　　万乎

同

枯のびる葉ゝ抽ん所哉　　落梧

荒野員外

雨ふるゝ蓮のちぐさ枯ゝ　　杉風

炭俵

なつかしや角ぐむ花のうめもゝ

ゝのごとく蓮ちぐさ枯ゝ　　仙化

かゝる所ハ何かりとゝ　　但ハコトヤノトヽ俗ニ云ク

するゝらゝ　ゆゝ　いつゝ　ゝ　他の循やゝ　れゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

荒野員外　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

つりくわ、てくるるれば、さ時の俗言かり、今のごとく、冠
さわぐ事、このまゝ、こめて、俗言、十三ヤヤ
とくつし、花ヤ紀番ヤ十三ヤヤなどつゞけ、このこと
十三ヤヤとふことと、同くくてくんぐるり、ゐく、諺やに
てくなふやうるれば、往古よりのやの、茶よりかやこと
つゞけり、たゞ、こゞ、は花やのみぐとうるぐゞとう言は、
花と紀番とうみて、備つなやたく、花とゐれば、紀番
ひうとうり、かゞ、ゐれば、ゐしひうゝかりやくさるやい
ともうて、けやの定るる時、こゞ二物とうぐるんなば、この
あく、諺のやの一例とうる

荒野　あとやされ、乳のつくゆゞの郭公　宣五

円員外　月や嵩やよくて、花の物うるぎ　野水

続俳義　春の雨すゞしくあやつぶ声　乙州

円　声おゝく猪波や四季の市の中　苔花

荒野員外　ほゝゝ瓜や苴やをかるい巴　旦藁

炭俵　蒟や　苴て　雀　鮒　を　敷　梨半

右のごとく蒟やちさたなどのみ、下のやのあるゐくゞ
ゐるゞんわなり

○第四例　末のや　トニ

これを、とりやたりやかなどのやのるし、そこで、「かくるゞ
こうるうるや」こゞりこんをようやゞ物とやかなどゝ、このこ
例のつく、わらうるうるとうるるゞ、人をもわるゝ、
まひこれゞ、ゞ、ゞ、

手ひくく文章のてをまなぶ法なり

よ

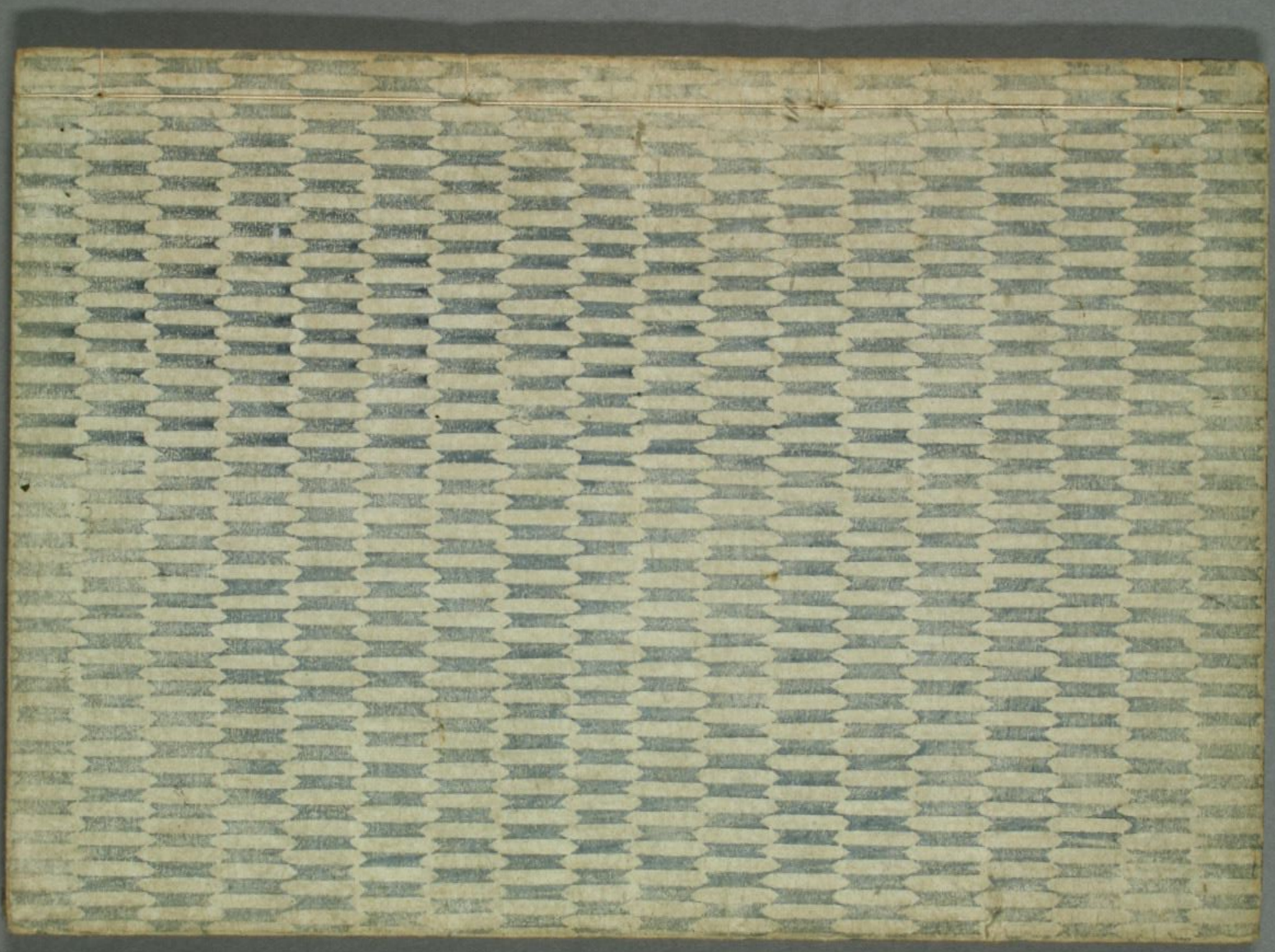
こゝろ　おもせよ　さとせよ　かどいつよりてあぢ　そわるこの跳の
屬く　ものり　時よりの　月　上の　孫の　中の　そらぬ　なり　五十音ニヨリテ利ト知トハ真反ナルヿ
ヲシレル　きわぐ　やこ　ひと　ことば　わん　よく　こゝろ　のあと　の　ことば　を
ベシ　おす　そ　ち　る　ん　く　ま　ま　つ　ま　ま　ま

同　塚つきまくる竹の枝　卯七
同　ゆく年よ京へとなくぐ秋ひろう　湖春
同　渦蓋のけぐくしうよ年の暮　孤屋
荒　折うけのあとをとる宝のうくれけり　揺丸
同　庵留の上るはつる沢あくれさく　樹水
同　つるどよ拾ふるもなふむし　竹人
軾　むしんあうのよ月は松ろよ　路通
員　百姓さくるひ所よくれの春　同
続　すぐしさよ牛の屋ちく川の中　万乎
猿　そうよる巻ひう萩の霜　杢由
同　晝嵐はよ書陵のあのうちとさく　芭蕉
同　ちるはのこうろあさく芭蕉の花　別僧　竹人

続　百姓よなりく世間ものどうさよ　馬莫
これるぐ牛ぐ人るぐよ拾ちるもかふ苦くふ白ん
誕のよれやるれど白ことをれるでさくあぐみ世ちく
こうろえるぐやくいぐ白ちれぐ今こうこれを
ぬずぐけ白ことすと物ちくく七夕ことぬるぐさく
のうのをこ白ることかさくふけうの歳すふ
早くあるくの雪しこれぐ拾ふ昼きちのまくよ
ちくうちくくたぐ一夜かるぐあくかくくあくぐ背ぐ
まりるあと棚極くくれぐさぐるくうかの
雪きあも出くぐりくくあることくくれるる
ちくよくくれうくくれ松機く食ぬあくあくしく
くぐりつくれぐ命くちくれ書の百ぐくく

さるものとも。さらく。ぜ。ぐ。ぐ。すとさ。く。ハ
いりまじ。これとあ。で。「さるぐ。やとつ。時く。常の人。
ぐたあつまるぐ。は。敬ぐ。ぐ。織ぐ。ぐ。ぐ。者と。
くぜぐ。常人の。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。
ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。ぐ。

かとい[illegible]嘆のかぎりをつくし・寺にくい[illegible]かるれなどらえ
ども・かるうい例・俳諧よりとられず・連歌よりとられず・俳諧とて
もつりつよあり・るまじ・純天ふ波なれど・なるほど例のすくるなめもと・知るべし・
おおむねやれや歌といふ例のみみえたり　芭蕉翁ノ「船路酔宿あれ川
うふナドハ・オホツカナシト云ヒヨカク
ヨツメテイ（ルモノニテ・コノふノ例ニハアラズ・寺ニテモワ子ニ
イトをクツカフつり・ちるふ「あちまおナドイフコレナリ
猿　むざんやなうしとの下の死かしも　芭蕉
実盛ガ甲ナドヲミテ
これは・かぶとの下に・白髪のふくむざんさ・実盛のとの特合・
他の鉄砲の玉ことなる・ふくられて・なとはたられも・そ
ばくよりつる繁のこと・ふくらぶ・繁すり・実盛い飯と
ちるべし・実盛が討死・他よりたぶ・すしとふ・ふくあるれむ・
このおれ字ことわる・姿ことわる・姿ことわる
荒　二月ともぬるうりいもぶ・昭花の花　古梵

同　芳野なる建長寺ニテ　越人
このおれつるまるる・厚あり・石の門のとおと・訓ずるふとぶ・越人
とふりあるる・載ふとふもちあり・荷そ・ふくふ・ふしあんすりすづく
ふるものふ・ふがれぬるあるとり・ふ・他のるがれぬをふんすり
とふるべ

俳諧天南波抄巻之一終